



富山市八尾地区 まちづくり調査報告書

2007年10月

金沢大学都市計画研究室

はじめに

21世紀の都市・地域づくりは、市町村が主体となり、それぞれの地域における資源や人材を生かして創意工夫のもとに進める必要があります。私たちの研究室では、このような問題意識のもとに、特徴的なまちづくりの工夫を行っている市町村を訪問し、まちづくりに関するテーマのもとに調査を行い、実態の把握と提案などを行う、学生諸君による自主的な研修を企画しました。今回は、富山市八尾地区を選定し、「建築・町並みの修景整備とまちづくり」、「風の盆と中心市街地活性化」、「市町村合併と八尾のまちづくり」を取り上げ、それぞれグループごとに調査を行いました。

調査を進めるに際して、富山市八尾総合行政センター総務振興課・農林商工課・建設課などの方々には多大なお世話になりました。また、各グループの現地調査に際しては、地元のまちづくり関係組織や住民の方々からのご意見をうかがう機会を持つことができました。聞かせていただいたお話の内容とともに、地元の方々に暖かく接していただいたことに学生諸君はとても感動しているようです。お世話になった方々に心からお礼を申し上げます。

本レポートは、各グループが、調査結果にもとづいて、その概要、感じたことや若干の提言についてとりまとめたものであります。短時間の調査であったため、必ずしも的確なものばかりではないかも知れません。しかし、プランニングを学ぶ者としての若い感性が垣間見られるように思います。少しでも参考にしていただくものがあればまことに幸いです。

最後に、今回の企画からレポートのとりまとめまで担当した研究室の大学院博士前期課程1年生諸君に賛辞を呈したいと思います。また、今後の富山市八尾地区におけるまちづくりのますますの発展を心から祈念いたします。

平成19年10月

研究室を代表して

金沢大学大学院教授

川上 光彦

目 次

1. 調査の概要	3
2. 建築・町並みの修景整備とまちづくり	4
3. 風の盆と中心市街地活性化	15
4. 市町村合併と八尾のまちづくり	32

1. 調査の概要

1. スケジュール

1 日目…9月 11 日(火)

09:00__角間キャンパス駐車場集合・出発

グループ毎に八尾地区中心地などを予備調査

11:00__宮田旅館駐車場に集合

各グループで昼食

13:00__富山市八尾総合行政センター訪問、説明を受け、討議

15:00__1 日目調査開始

17:30__1 日目調査終了、旅館集合、グループごとにプレゼンの作業

18:30__夕食、プレゼンの作業

21:30__調査結果発表、景観大賞発表

2 日目…9月 12 日(水)

8:00__朝食

9:00__徒歩で宿泊施設出発

2 日目調査開始、各グループで昼食

13:00__2 日目調査終了（宿泊施設集合）

13:30__富山市八尾町にて現地解散

2. グループテーマ及びメンバー

A グループ調査テーマ：建築・町並みの修景整備とまちづくり

B グループ調査テーマ：風の盆と中心市街地活性化

C グループ調査テーマ：市町村合併と八尾のまちづくり

表 1-1 グループ構成

A グループ	B グループ	C グループ
生駒 奉文	恒川 真康	中野 達也
西本 瑛一	杉田 広明	田中 志野
講神 雅人	本舘 孝文	串田 隆昭
藤田 和也	竹迫 圭祐	小林 直史
望月 苑	蓮實 祐樹	竹内 俊雄
陳 萍	宮脇 達也	中山 祥子



2. 「建築・町並みの修景整備とまちづくり」



A グループ

博士後期 2 年 陳 萍

博士前期 2 年 生駒 奉文

西本 瑛一

博士前期 1 年 藤田 和也

講神 雅人

学部 4 年 望月 苑

1. はじめに

i) 調査目的

2007年9月11, 12日に、富山市八尾町で「建築・町並みの修景整備とまちづくり」をテーマに調査を行った。

八尾町は、中心市街地の修景整備に力を入れており、町並み（格子戸や白壁）だけでなく、諏訪町本通りの石畳舗装や無電柱化等の整備がされている。2005年に富山市と合併し、今年から一部中心市街地を対象とした修景補助策を実施し、町並みの修景整備を目指している。そこで、今回は中心市街地を歩き町並みを確認すると共に、町並みの修景整備に大きく関わっている、「行政」、「地域住民」、「八匠」という3つの視点から修景整備に関する調査を行い、修景整備とまちづくりに関する現状と今後の整備についての提案を報告することを目的としている。

ii) 調査内容

- ・行政へのヒアリング

市役所の方に建築・町並みの修景整備についてヒアリング調査を行う。

- ・現地調査（地域住民へのヒアリングを含む）

町並みの修景整備の現状を把握し、修景整備や町並みについて地域住民の意見を聞く。

- ・八匠へのヒアリング

八匠の方に、八尾町の修景整備についてヒアリング調査を行う。

- ・調査エリア

中心市街地である、諏訪町、東新町、西新町、上新町、鏡町、東町、西町、今町、下新町。また八匠が、最初に八尾型モデル住宅団地の建設として手がけた上野かざみ台住宅団地を調査した。

iii) 調査スケジュール

1日目

11:00	現地調査（中心市街地）
13:00～15:00	八尾総合行政センター訪問
15:30～17:30	八匠訪問（理事長：石原氏）
17:30	調査終了

2日目

09:30	現地調査（上野かざみ台住宅団地）
11:00	現地調査（中心市街地）
13:00	調査終了

2. 行政センターでのヒアリング調査

日時：平成 19 年 9 月 11 日

時間：13：00～15：00



写真 2-1 行政センター訪問の様子

i) 八尾町の行政の取り組み

八尾町では町固有の住文化が失われつつあることを省み、歴史・風土・文化などの豊かな環境を生かした住宅づくり、そして住宅を取り巻く住環境の整備を目的に昭和 62 年、八尾町地域住宅計画（HOPE 計画）を策定した。

この計画に賛同した地元の 16 の工務店と 5 つの設計事務所が、平成元年に「八匠」を組織し「人が住みたくなる街」「八尾のイメージをつくる町並み」を目指して、伝統工法による「八尾の家」づくりに乗り出した。

次に岩瀬の街並み保全事業に触発されて進められた「八尾町歴史的地区環境整備街路事業」を平成 2 年度から平成 11 年度まで実施し、「魅力あるまちづくり事業」を昭和 63 年度から平成 7 年度まで実施。これらによって道路の石張舗装・電線類地中化・ポケットパークの整備や、木製の街路灯・自然石の足元灯・道路側溝を利用した水車・流雪溝や下水道マンホールのデザイン蓋の設置での景観の形成を行った。

また河岸段丘上の台地上の土地に町が展開しており、川沿いは急崖となっていて数多くの階段が町の中心とを結んでいるが、中でも聞名寺に近い西町辺りは、石垣景観保全で整備し、丸い川石をうず高く積上げた石垣が連なる眺望を形成している。

近年では「八尾地区街並み集計等補助事業」により八尾らしい街並みを形成していくための補助制度が制定された。適用期間は平成 19 年度 7 月 1 日から平成 23 年度までの 5 年間とし、早期の効果発現を図るため、前 3 年間の補助を手厚くしている。

ii) 八尾町の行政の特徴

◆八尾地区まち並み修等景等補助事業

特徴として、「建築物外観修景」「格子等修景」「外構物修景」といった通りから見える部分の工事を対象として助成している。これは、補助対象者に八尾型の外観に改修して満足してもらうため、というよりも補助により統一した外観を、訪れる人々や観光客に見てもらうことに重点を置いているからである。八尾の景観に満足し、興味を持った人々が口コミを醸成し、訪問者の増加を促す。そして訪問者の増加に伴い、八尾ブランドが確立され、居住者や改修者の増加も考えられる。それにより八尾型住宅への愛が深まり、正のスパイラルが生じると考えられる。このように補助事業には短期的な改修を増やすだけでなく、将来を見据えた展望があり、興味深い。

◆八尾愛に基づいた住民、民間との協働

修景に対する興味の誘発、指導などにおいては「広報とやま」「タウンミーティング」八匠との協議「壮年層への指導」など、様々な努力が行われているが、住民や民間との協議などにおいては何度も会を設け、多大な努力を重ねている。

昔からの八尾型住宅が並ぶ地域にも近年、住宅メーカーなどが参入してきている。それにも関わらず地域住民が率先して軒先に花や緑を提供するなど、町並みの美化に協力し、地区計画や条例などの制度的な裏づけに頼らず、日々の生活の中から生まれていると思われる美しい街並みを造っていこうという意識に強く支えられ、八尾の町並みは守られている。この積極的な住民の参加の根底にあるのは、やはり八尾に対する愛である、と行政センターの担当者は答えられた。この町を好きな人が多いのが成功の理由であると。その理由の一つとしては、幼少時代から「おわら風の盆」に参加し、自らも踊りの練習をし続けてきたことが関係しているのではないだろうか。地元のイベントに参加し、それが全国的にも高く評価されていることを目の当たりにすれば、自身の町に対する誇りや愛といったものは自然と育まれていくと考えられる。

iii) 今後の課題、問題点

八尾は高齢化が進んでおり、観光地として来客者は多量だが、住み着く若い人々が少ないと考えられる。八尾の良好な景観を若人が愛し保全していかなければならない。また、上記でも述べたが、人々が町を愛するには「おわら風の盆」の発展も必要である。そこで、この風の盆にやってくる沢山の観光客に効果的に八尾への移住を促すべきではないだろうか。しかし八尾を徘徊してみて、スーパー・コンビニエンスストアといった若い家族が必要とする店舗が明らかに少ないので、拡充する必要があるだろう。

3. 八匠へのヒアリング調査

日時：平成 19 年 9 月 11 日

時間：15：30～17：30

対応者：石原 博氏(有限責任中間法人 八匠理事長)



写真 2-2 八匠訪問の様子

i) 有限責任中間法人 八匠の概要

平成元年 10 月、建設省の HOPE 計画が発端となって八尾の大工棟梁・工務店 16 社、建築設計事務所 5 社が集まって匠の会「八匠」が結成され、平成 10 年に再結成されました。八匠は八尾型住宅の建築に高い技術力を備え、八尾型住宅の普及と町並み整備を推進するため、法人格を取得し活動をより充実させていくこととなった。近年、市街地では八尾型住宅に建替える住民が増え旧町は調和の取れた、美しい町並みに整いつつある。

ii) 八匠の組織

「有限責任中間法人 八匠」には地域の大工棟梁、工務店など約 100 人の職人が所属している。八尾の職人が約 200 人であることから、八尾町にある工務店の半分は八匠に所属していることになるが、八尾型住宅への修景に占める八匠のシェアは 4 割程度である。また、八匠に所属する団体に上下関係はなく、八匠において物事を決定する際には、全員の同意を必要としている。また、資金については、所属している工務店などの規模に関わらず、一律の運営金を集めている。一律にしているのは、規模によるランク付けを行ってしまうと、発言力に支障をきたすことを防止するためである。

iii) 八尾型住宅の特徴

八尾型住宅の外観の特徴は、軒先の「出し梁」や「出桁」・「腕木」などによる深い庇が陰影感のある表構えを表出している所である。軒先の「出し梁」の技術は、飛騨古川から伝播してきたものであるが、八尾の雪が古川に比べて重いため、「出し梁」の距離は古川の 5 尺よりも短くなっている。

また、漆喰壁や格子、出入口の大戸が歴史を感じさせる。伝統的町屋では、主屋や店先の板庇に吊るした「雁垂れ」と呼ばれるものもある。雁垂れは、室内への日差しよけや雨よけとして機能すると共に、奥行きや陰影感のある風情をかもしだします。また、八尾型住宅の敷地内に雪下ろしと採光の確保を目的とした中庭を設けることにより、切妻屋根葺きに揃った町並みが形成されている。

iv) 八尾型住宅への修景・建替えへの動向

約 20 年前に八尾町で HOPE 計画が策定されたことをきっかけに、おわらの似合う団地の

建設を目指して、建設省のウッドタウン制度を利用し、上野かざみ台団地が建設された。これを契機に諏訪町などの旧町において、住民が自主的に八尾型住宅への修景を行うといった動きが見られるようになった。さらに、平成 19 年に富山市において「八尾地区まち並み修景等補助事業」が始まり、修景・建替えを行うにあたり補助金の支援が行われるようになり、その動きに拍車がかかってきている。具体的には、現在の補助対象範囲外からも八尾型住宅への修景・建替えを行いたいという住民の声が多く、将来的に補助対象範囲になると予定されている地区の住民の方には、修景・建替えを待つように働きかけているといった動きが見られている。

v) 行政との協働

富山市の都市計画課において岩瀬の町並み保全に続いて、八尾の町並み保全について補助事業を計画する際に、八匠が補助事業内容の原本を作成し、それをもとにして上述の「八尾地区まち並み修景等補助事業」の補助内容が決定した。また、役場において申請の受付を行う際に、補助を受けたい住民に申請書類の訂正を促し、最大限まで高い補助を受けられるように住民とのキャッチボールを行うように八匠が行政に働きかけている。

また、補助の額を決定する審査会にも理事の石原氏が、民間人として唯一参加していることから、行政任せにするのではなく、行政と協働して八尾町をより良い町にしようという想いが見られる。

vi) 他の工務店と八匠の関係

八尾町には、八匠に属していない地域の大工棟梁・工務店も数多くあるが、それらと八匠は建築組合の会合等で交流しており、一緒に補助事業の勉強会を行うなど、競合しながらも良好な関係が築かれていることが伺える。

vii) 今後の課題・問題点

最後に、今回のヒアリング調査で明らかとなった八尾の町並みの修景整備における課題をまとめる。

まず、八尾町は住宅の修景・建替えは、比較的順調に進んでいるといえるが、店舗・商店等の修景・建替えは、構造や外観等の問題から困難であるという問題がある。これらの建替えを促進するような法的拘束力のある条例等の制定、施行が望まれる。

次に、若い世代が建替えを行う際に、住宅メーカー等が参入してくることにより、八尾らしい町並みが壊されていく恐れが生じてきている問題がある。どのような建替えを行うかということはあくまで個人的な嗜好に一任されるため、若い世代の人に八尾らしい町並みの素晴らしさを伝えることが重要であると考えられるが、今までもそういった活動が行われてきたとの経緯からも、一筋縄ではいかない根の深い問題であると思われる。

4. まとめ

今までの行政、住民、八匠に対する調査のまとめとして、八尾のこれからのまちづくりに対して提案を行いたいと思う。

八尾という町は条例などの規制をかけずに、八匠を中心として個人個人の家の修繕によって八尾らしい町並みを作り出してきた。そのように八尾独自のプロセスによって町並みが形成されてきた背景には、おわら風の盆や曳山祭りなどといった郷土への愛着と誇りがあったからだと考えられる。しかし、条例などの規制がないため町並みを形成する建物すべてを八尾式の住宅とするにはいたっておらず、ところどころに洋風な家が建てられている。本来ならそういった事を町並み形成上の問題点として挙げるべきなのであろうが、今回訪れた八尾の町の場合は、こういった事態をプラスとしてとらえてはどうかと我々は考えた。というのは、条例によってがんじがらめに規制を行って建物の改修を行っていくよりも、今回の八尾のように住民の主体性によって町並みが築かれていくというプロセスのほうがより生き活きとした住民の顔が見えるまちづくりが行われていると考えられるからだ。そして、町並みと調和しない家についても今後八尾で暮らしていく中で、八尾の風土への理解をした上で自然と町並みに合うような形で改修がなされていくことが最善のプロセスであると考えられる。

また、八匠の代表者の方との話で出てきたことだが、商店などを八尾式にできないだろうかという話が出てきた。八匠の代表者の方がいうには商店などの改修はショウウインドウなどを設けなければならない場合に困難であるということだった。そこで、商店の改修のアイデアを、八尾内外を問わずに募ってみてはどうかと我々は考えた。そうすることによって新たな八尾式のかたちを見つけていくことができるだけでなく、八尾に住んでいない人々にも八尾式住宅の存在を知らせることができる大きなチャンスになると考えられる。

5. 感想 (Aグループ)

陳 萍 (D2)

富山八尾町で見学をして一番印象に残ったのは、「日本の道 100 選」に選ばれている一筋の道です。石畳の道と格子戸の家並みはこの道の特徴です。じっくり町並みを見回し、日本の歴史や文化を肌で感じる事ができた 1 日になりました。

それに八匠という専門家集団の理事長にインタビューして、八匠が魅力的な町並みの保存と創造の上で如何に重要であるかを教えてくれました。

生駒 奉文 (M2)

今回の研修旅行で訪れるまで八尾町は、「おわら風の盆の街」というイメージしかありませんでした。しかし、実際に訪れて諏訪町を見て、なんて素晴らしい町並みが残っている街なのだと素直に驚きました。電柱が地中化されて格子が美しい表構えの連続した町並みに圧倒され、住民の方が自主的に軒先に提供されている緑に癒されながらまちなかを散策することができました。

また、八尾にはご年配の方が多く、高齢化が進んでいるといった印象を受けました。今後、さらに少子高齢化が進行することが叫ばれている今日であるからこそ、若い世代が八尾の良き伝統を継承していくことが必要であると感じました。

インタビューさせていただいた八匠の理事長である石原さんは、まさに「職人」といった雰囲気を持たれていて、非常に気さくな方で、楽しくインタビューさせていただきました。

西本 瑛一 (M2)

まず、諏訪町通りの長さに驚きました。八尾型住宅が連なる姿はカッコイイと素直に思いました。中には八尾型ではない住宅もありましたが、全てが統一されていない、完璧じゃない、という点である種の「自然さ」を感じました。金沢にも「東茶屋街・西茶屋街」といった町家が連なる通りがあるのですが、距離が短いですし、いかにも「作られた」という感じが否めません。諏訪町通りの住宅の全てを完全に改修できれば更に良い町並みが出来るかもしれませんが、私は 7 割程度でも広範囲に続いたらそちらのほうが「自然」で良いのでは？とも思いました。

今回の研修旅行では、八尾の様々な方々と出会いましたが、町に対する熱い愛情、この町は良くなっていく、という思いを強く感じました。昨年も今回の研修旅行と同じように、新潟県糸魚川市を訪れたのですが、正直「愛」を感じませんでした。(特に行政の方々の自信の無さが顕著に出ていたと思います)八尾の綺麗な町並みの保全はこの町に対する思いの差が強く関係していると思っています。八尾の町が愛される仕組みをもっと強化し、ずっと愛される町でいて欲しいと思います。

講神 雅人 (M1)

今回、町を見て歩き「観光地」としては、格子戸や白壁、電柱の地中化など、非常に魅力的であると思いました。また、地域付合いを大切にしている、おわら風の盆には子供から大人まで住民が一体となって活動しているという印象を受けました。そのことなどから、地縁のつながりが強いためと感じた。よって、問題点として外から来る「居住者」が、積極的に地元住民と触れ合うことができる人でなければ住みづらいのではないかと感じました。

住民・行政の方々や八匠の石原氏とお話を通し、2005年に富山市と合併したことで、本年度(H19)から外装を対象にした修景補助策が打出されていることや、補助期間後についての課題が分かりました。

行政の方の印象としては、八尾町を住みやすい町にしようという熱意が伝わってきました。そして、快く訪問を了解して下さった石原氏は、修景整備に関する自分の意見を持ちながらも、行政や地域住民の気持ちも十分理解されており、それらを裏表無く気さくにお話していただいたので、多くのご意見を伺うことができ非常に参考になりました。

2日間という短い日程でしたが、町を歩いたり、お話を伺ったりすることで、まちの見方・歩き方の勉強にもつながったと思います。

藤田 和也 (M2)

八尾という町の存在は以前から知っていましたが、なかなか行く機会がなく、今回の研修旅行は非常に楽しむことができました。

事前学習しているうちに八尾という町は条例による規制をかけることなく、八匠を中心として住民が自分達の町をよくしていくために自主的に八尾らしいまちなみを築きあげていることを知り、感銘を受けました。実際に八尾の町を歩き住民の方々とお話をしたり、八匠の代表の方とお話をしてみても、八尾の住民の方々自分達の町に誇りを持っており、そういったことが自主的な改修を促すこととなったと思います。そういった住民たちの誇りの源となっているのは、八尾の風土とおわら風の盆や曳山祭りといった八尾ならではの行事などがあると考えられます。

八尾は、おわら風の盆や曳山祭りのみならず年間を通じて観光客を呼び込もうとしていると行政の方々から聞きました。そういった例として10月に坂の道アートというイベントがあるそうです。八尾のまちなみには色々なものを受け入れる懐の深さのようなものを感じました。これからも良い意味で変化し続ける八尾でいて欲しいと思います。そして、また八尾を訪れたとき、さらなる八尾の魅力に出会えることを願っています。

望月 苑 (B4)

今回の研修旅行では、グループで八匠の石原さんと諏訪町本通りの住民の方とお話させて頂きました。住民のおばあちゃんたちはとても仲良しで、おしゃべりをしている中に私

たちを快く迎え入れてくれました。偶然にもその中には新しく八尾形式のおうちを建てた方がおられ、お話を聞かせていただきました。やはり、どちらかという八尾形式のおうちを建てることを当たり前のように思われており、工務店さんの提案を中心に、希望を叶えていくようでした。近くにスーパーがないので、年配の方のために隣町の端にあるスーパーが平日にマイクロバスで午前には3回、午後にも数回とおり、町の方たちの生活に重要な役目を果たしていました。小さなスーパーが好意だけでできることではないので感心しました。他には、石畳みにつまづいて危ないことや、外観が八尾形式であっても内装はそこまでこだわっていないこと、昔ながらゆえに家の中に段差が多く、近年注目されているバリアフリーに対しては意識が薄いことが伺えました。基本的に、年配の方が多いためか、駐車スペースを設けているおうちは少なく、町の中ですべてまかなう生活をされていました。

八匠の石原さんも楽しく気さくな方で、心の広さを伺うことができました。八匠は利益を考えたものではなく、流れで立ち上げた組織であり、あくまで強制ではなく、住民の自由を尊重したうえで仕事をこなしているとおっしゃられていました。立ち上げた当初には一度は解散してしまった八匠ですが、職人として、住民としての町を良くしようという考えのもと再結成されたという話を聞き、尊敬の念を抱きました。

また、市役所の方々の「おわら風の盆」の悩みや期待、葛藤などのお話をきいて、研究室の中にいるだけでは感じることでできない具体的なまちづくりを感じることができました。

今回の研修旅行は、単純に楽しかったです。

おそばもおいしかったし、アイスもおいしかったし、みんながいて楽しい一泊二日でした。来年も行きたいな。



3. 「風の盆と中心市街地活性化」



班員

恒川 真康 (博士前期 2 年)

杉田 広明 (博士前期 2 年)

本館 孝文 (博士前期 1 年)

竹迫 圭祐 (博士前期 1 年)

宮脇 達也 (学部 4 年)

蓮實 祐樹 (学部 4 年)

1. はじめに

八尾町では、毎年9月1日～3日の三日間で風の盆という民謡行事が行われている。風の盆では、涼しげな装いの浴衣に編笠の間から少し顔を覗かせた踊子達が、それぞれの町の伝統と個性を謡い踊るといふ行事であるが、風の盆には三日間で25万人ほどの観光客が人口5千人規模の小さな町にあふれるといった盛況振りである。現在では舞台での定期公演も行っており、伝統芸能が映える町として振興を図っている。

また、最近では東京大学都市デザイン研究室の『八尾プロジェクト』といった研究が行われ、八尾町商工会より委託を受け中心市街地の再生のため調査・提案を行っている。

しかし、上記したように三日間で25万人もの観光客が押し寄せるため、観光客数のキャパシティを超えるものとなっており、ごみ問題や交通渋滞、駐車場等の交通問題、観光客のマナー低下という問題が見られるようになってきている。そのため、前夜祭や月見のおわらを設けるなど、観光客の分散を図っている。その他にも行事を増やしたいが、一年を通してそれぞれの行事の準備等で忙しいため、現状では考えにくいとおっしゃっていた。

その他の問題点としては、風の盆が行われる期間において、観光客が八尾町ではなく隣接市町村、あるいは隣接県で宿泊等の経済活動を行うため、八尾町での経済効果があまり見込めない「経済のドーナツ化」が挙げられる。また、風の盆をはじめとした行事により、定住者を増加させていきたいが、実質的な空き家が少ないという現状もあげられる。

これらの問題点を踏まえ、それに対する施策や風の盆とまちづくりに関する活動の実態と今後の可能性について調査することを目的としている。

i) 調査内容について

八尾町の方々による説明から八尾の現状を伺い、その後「中心市街地活性化やまちづくり活動とおわら風の盆」に着目した調査を行った。内容としては、風の盆とまちづくり、主に中心市街地をどのように活性化するのか行政と住民の両者にヒアリング調査を行い、実態と今後の可能性について調査することとする。

ii) 調査スケジュールについて

9/22 (金)

八尾町より、町の概要についての説明をいただいた。その後、行政側には農林商工課・建設課の方、住民側には商工会、観光協会の方にヒアリング調査。

9/23 (土)

住民の方々へヒアリング調査と街並み調査

iii) 調査ルート



図 3-1 Bグループ調査ルート

2. 八尾総合行政センター

i) 概要

八尾地区には市町村合併後、旧役場に八尾総合行政センターが設置されている。

その中でも、おわら風の盆の運営には農林商工課が携わっており、また、中心市街地活性化やまちづくり等に関してはさらに建設課、総務振興課が携わっているため、今回は農林商工課の方と建設課の方にヒアリングを行った。

おわら風の盆は、八尾地区にとって大きな年間行事の一つとなっており、中心市街地活性化がさげばれている今、八尾地区を全国に知ってもらいたい機会だと考えられる。そこで、ヒアリングではおわら風の盆と中心市街地活性化について、行政側はどのように捉え、どのような施策をとっているのかをヒアリングしてみた。

ii) 八尾総合行政センターへのヒアリング

- ・ 場所：八尾総合行政センター2階
- ・ 時間：15:00～16:00
- ・ 対象：八尾総合行政センター建設課 小林さん
農林商工課 若松さん

◆質問1 風の盆を利用したまちづくり政策の現状は？

- ・ 月2回、曳山展示館で風の盆の舞台を企画しています。これにより、風の盆の本祭りで多くの観光客の中で見なくても、障害を持つ方や高齢者の方が安心して見ることができます。
- ・ 修景事業を行うことで、年間を通して風の盆の雰囲気味わってもらいたい。(ぼんぼりによる幻想的で淡い光を街灯にも取り入れるなど)
- ・ 駐車場や施設整備を行うことで、中心市街地を囲む地域において回遊ルートを開設します。図2で見て分かるように、駐車場は八尾小学校と曳山展示館駐車場、町民広場を整備し、それらを結ぶトライアングルを作ります。また、観光施設は聞名寺とおわら資料館、曳山展示館を整備することで、それらを結ぶトライアングルができます。そこで、中心市街地を網羅する回遊ルートが形成されます。



写真 3-1 ヒアリング調査の様子

◆質問 5 今後、どのように改善していければよいか？どのような団体があればよいか？

- ・ 風の盆の3日間で観光客がキャパシティを超えるほど来ている中で、八尾への定住を促進していきたいと思っているが、街の中に実質的な空き家はなく、なかなか思い切った政策を打ち出せないでいる。また、もっと年間行事を増やすことで、観光客を増やすといったことも、曳山や風の盆の準備で忙しいためできない現状である。そのため、まちづくり会社のようなものを設立し、空き家の管理や情報発信等を行って欲しい。

iii) 感想・考察

今回は、お忙しい中、ご協力して頂きありがとうございます。また頂いた皆さんの資料は、参考にさせて頂いております。まず、今回のヒアリング調査で一番驚いたことは、観光客が八尾地区のキャパシティを超えているために、風の盆だけではなく前夜祭などで観光客の分散を図っていることだった。本当であれば観光客誘致を推進していくと思っていたが、八尾地区の場合はむしろ本祭においては観光客をこれ以上増やすこと



写真 3-3 ヒアリング調査後の様子

は無理なようだった。さらにメディア等の宣伝はほとんど行っていないということも聞くことができた。その半面で、通年における安定した観光客誘致や、定住者の増加も目指しており、その点において行政の方々も頭を悩ませている印象を受けた。これらが民間団体とも協力していかなければならない課題だと感じた。

また、中心市街地活性化のために回遊ルートの開設等通年の事業が進められており、八尾地区における現状はそうした意味では、まだ第一段階にあるが、さらに交通規制や駐車場問題等の交通問題や中心市街地活性化等のまちづくりに関する問題に対して、直接的な事業も必要になってくると考えられる。

2. 八尾町商工会

i) 概要

商工会は地域内商工業者の経営の改善に関する相談とその指導、地域内経済振興をはかるための諸活動及び社会一般の福祉の増進に資することを目的として、幅広い活動を行っている。またその地域の商業の活性化を行っているところであり、よってその地域のまちづくりには大きな役割をもっているものである。そこで風の盆とまちづくりの関係において商業面でおおきな役割を担っていると考え、八尾町商工会にも話を聞かせてもらうことにした。

(団体名) 八尾町商工会

(代表者) 川原 敏彦

(目的) 1. 会員企業の経営体質強化への支援の充実
2. 地域の活性化
3. 広域連携事業の拡充
4. 商工会組織再編(合併)の推進

(平成 19 年度の主な取り組み予定事業)

1. がんばる商店街支援事業
2. 特産振興支援事業

ii) 八尾町商工会へのヒアリング調査

・ 場所：八尾町商工会 2 階

・ 時間：PM4:30～5:30

・ 対象：八尾町商工会事務局

事務局長 中村美智則

質問 1 八尾町商工会がまちづくりに関して行っていることはどういったことか？

- ・ 市からの支援を受け、観光協会等と協力しながら様々な事業を行ってきた。近年は空き店舗を利用して実験的にカフェを設置したり、「坂のまちアート」といった芸術鑑賞をきっかけとして商店街を賑わせたりするなど、商店街内の回遊性を高め、年間を通して観光に来てもらえるような事業を行っている。



写真 3-4 ヒアリング調査の様子

質問2 行政との関係はどうか。また、行政に対する要望はあるか？

- ・ 商工会は行政からの補助金で動くという面もあり、今後も行政と一体となって足並みを揃えていく必要がある。商工会は、住民と行政・銀行との橋渡しの役割があると考えており、今後も住民の要望を行政に伝えていくことが重要であると考えている。

質問3 特に観光面におけるまちづくりの今後の課題は何か？

- ・ 「風の盆」の三日間に観光客が集中し過ぎて、旧八尾町のキャパシティを完全に超えている。一年を通して観光客に訪れてもらえるようなまちづくりを進めていく必要がある。また、宿泊施設等が少ないこともあり、観光客が多くても実質的な経済効果は薄い。

質問4 課題解決のために具体的に行っていることは何か？

- ・ 「坂のまちアート」は八尾町の二大イベントである「風の盆」「曳山祭」とは異なる新しいイベントを創出することにより、商業の活性化に結びつけるきっかけになると考えている。また、空き家や空き店舗の利用・ファサード整備により、町並みに統一感が生まれ八尾町の魅力は増したと考えている。さらに、商店の人を対象に、八尾町や風の盆の歴史等を学習できる場を設けて、商店の人自らが観光ボランティア的な役割をしてもらえるように、商工会も動いている。

質問5 まちづくりにおいて重要なことは何か？

- ・ まちに人が住み続けて伝統文化を受け継いできたことで今の八尾町がある。観光客のことを考慮することも重要だが、地域を守るためのインフラ整備が必要となってくる。



写真 3-5 ヒアリング調査の様子

iii) 感想・考察

今回は、お忙しい中、ご協力して頂きありがとうございます。また頂いた資料は、参考にさせていただきます。

今回のヒアリングで気づいたことは、まちづくりに関して行政センターも商工会も同じようなまちづくりに関する課題を感じているということである。人口 6000 人程度の小さな旧八尾町に「おわら風の盆」の期間だけで 20~30 万人の観光客が押し寄せてくることによる様々な弊害、少子高齢化や人口減少による伝統文化の保存・継承への不安、郊外の大型

店による商店街への集客力の低下などが、共通の問題点として挙げられていた。三日間に集中する観光客への対策としては、前夜祭や他のイベントを催すことで分散させるといった対策を講じており、「風の盆」以外の期間での観光客は伸びているが、集中する観光客の分散には至っておらず、まだ課題は残っていると思われる。ただ、年間を通して観光客数を確保するといった点では、今後も成果が見込まれると考えられる。

3. 越中八尾観光協会

i) 越中八尾観光協会へのヒアリング調査

- ・ 場所：越中八尾商工会館 1 階
- ・ 時間：PM3:30～4:30
- ・ 対象：越中八尾観光協会
事務局長 布谷博之さん

質問 1 八尾観光協会の具体的な目標とはどういったものか。

- ・ 大きな目標としてはおわら風の盆と曳山祭以外の通年的な観光客を増やすことです。そのためには準住民（他の土地に移ったが子供など連れて祭りなどには頻りに帰ってくる人々やリーピーターの観光客）を増やすことが大切。

質問 2 具体的にはどのような業務を行っているか。

- ・ 観光協会では、踊りの通年的な鑑賞、商店の活性化、坂のまちアートなどを行っている。民間はソフト面の充実を図るべきであり、そのために空家を利用することも考えられる。

質問 3 ハード面としてはどのような業務を行っているか。

- ・ ハード面としては何もしていない。その理由としては何もせずに住民による自然発生的な変化のみに頼る方が長いスパン考えると八尾にとっていいことだと思う。

質問 4 行政にはどのようなことを望むか。

- ・ 行政には行政にしか出来ない大きな仕事をしてほしい。住宅の細かい設定ではなく無電柱化、舗装や水路の改装などのことを行ってほしい。

質問 5 市町村合併に関して何か変わったか。

- ・ 市町村合併を前に観光協会は法人化し、行政がどのような体制になろうと同じサービスが出来るようにした。

質問 6 今後どのようなまちづくりを目指していくのか。

- ・ 高度経済成長期には八尾にも洋風の建築がもてはやされた時期があった。そのときに古い建築物の多くは取り壊された。その後、現在のような建築が再度増えてきた。そのため、八尾は伝建地区のようなものにはなれないし、そのようなものを目指してはいない。八尾はこれからも、今あるいいものを残しつつ新しい文化を取り入れつつ変わっていきたい。おわらも今のおわらを残すのではなく日々新しいものを取

り入れていきたいので、現在のままのおわらを残そうとする県の無形文化財の誘いを断った。

ii) 感想・考察

今回は、お忙しい中、ご協力して頂きありがとうございます。また頂いたたくさんの資料は、参考にさせて頂いております。まず、今回のヒアリング調査で一番驚いたことは、おわら風の盆に対する考え方です。県の無形文化財としての登録を断わり、風の盆は変化し続ける町民文化として、何ものにも捉われず残っていくのではないかと感じました。まちづくりに関しては、通年的な観光客を増やすために行政がハードの面を、民間がソフトの面を充実させることで、まちの活性化につながるとしており、行政に対する提案もいただきました。今後まちづくりが進む中で、行政とは違った視点から意見や提案を行えるのではないかと思います。そこで、風の盆を運営するに当って協力を得る行政や商工会などと、意見交換の場を設ける必要があると思いました。そうして新たな八尾の魅力が引き出されることで、交流人口の増加、ひいては定住人口の増加につながっていくのではないのでしょうか。

4. まとめ

今回、八尾町行政センター、八尾町商工会、観光協会の三者の意見を聞くことで、八尾町全体として、おわら風の盆を利用してどのような中心市街地活性化の方法を考えているのか調査を行った。

その調査結果を通して私たちが感じた三者の考え方は以下の図のようにまとめられる。

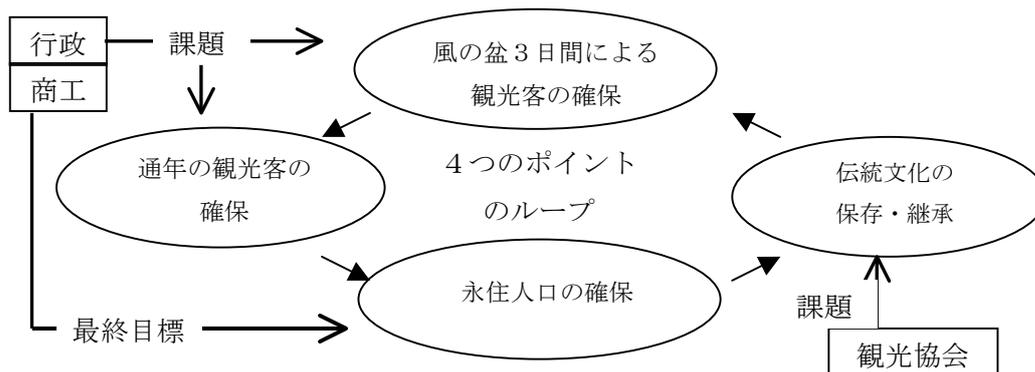


図 3-1 風の盆と中心市街地活性化に関する意識

まず行政センターとしては、中心市街地活性化の一番のポイントは永住人口の増加であり、そのための工程として風の盆当日の観光客を増加し、その波及効果として通年の観光客を増やし八尾の良さを多くの人に感じてもらうことを重要だと考えていた。具体的な政策としては、駐車場や八尾の観光名所を巡れるように地区の回遊性を向上するような整備計画を行っていた。

商工会でも、やはり定住人口の増加による消費者人口の増加が一番の課題だというように考えているようだったが、行政センターよりもソフト面の対応が重要であると考えているようであった。具体的には女性部、観光ボランティアなどによる意識向上である。これは自分たちの触れあう観光客一人一人に八尾の良さをわかってもらいたいという、観光客と直接触れ合う商業者ならではの考え方だろう。

最後に観光協会、ここでは他の二者と大きく異なり、風の盆を中心市街地活性化に利用しようという考えは持っていなかった。というより、活性化とは経済的な活性ではなく八尾の伝統を引き継ぐことが八尾にとっての活性化であると考えているようだった。

これらの調査の中で私たちが感じたことは、住民一人一人の八尾の伝統を守るという意識は高く町全体が一体となって八尾を守ろうとしていることだ。しかし、職業が異なればその守り方が異なり、行政センター、商工会、観光協会という順で住民に近い立場になればなるほど、経済的な問題から八尾地区の伝統の保存・継承へと考えが移行しているようであった。観光資源を利用した経済的な発展も伝統の保存継承も八尾にとっては重要な課題である。しかし、図中の4つのポイントを見るとわかるように4つのポイントはループ

しており、全体をバランス良く向上させていかなければ、八尾の活性化も伝統の保存もありえないだろう。そのためには、行政などのハード面を扱う側と観光協会や地域住民などのソフト面を扱う側がもっと意見を交換しあい、お互いの連携を高めることが非常に重要である。行政が観光客や伝統を保存する人々と直に触れ合う機会ふやしたり、商業者や地域住民が八尾の未来を真剣に考えるワークショップに参加したりといったような町全体の意識の統一が八尾に今一番重要なことなのではないだろうか。

5. 感想

杉田 広明 (M2)

今回、八尾を訪れて、歴史的な街並みが残り、落ち着きのある町だなと感じました。また、夕方に町の坂の上からをみると夕日がとてもきれいで、自然にも恵まれた町だと思います。しかし一方で、町の活気が乏しく、少し寂しい感じがしました。また、車の通りが多く、路上駐車もあるため、歩行者にとっては危険で歩きにくいという感じも受けました。

昨年の糸魚川市ではおわら風の盆をきっかけに活性化に取り組んでいました。また、市の職員の方がおっしゃっていた話からも、市が積極的に活動していることがわかり、こういった市が増えれば良い町が増えていくだろうと感じました。今後高齢社会を迎えるにあたって、まちなかの利便性の向上は急務であると思います。街並み・居住性の両方を求めることは資金などの面でも厳しいとは思いますが、住民を含めた市全体で町を盛り上げていってもらいたいと思っています。

最後になりますが、お忙しい中、我々の質問に丁寧にお答えいただいた八尾総合行政センターの方、観光協会の方々、地域住民の方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

恒川 真康 (M2)

まちづくりにおいて最も大切なものは、まちのハードとソフトの部分の両面を統括的な視点から見て、そのときのまちの状況にあったまちづくりの政策等の提案を行い、町全体で議論しあうことだと思う。

今回の八尾町における調査では、そのハード的な部分（行政）とソフト的な部分（商工会、観光協会）が協働してまちづくりを行うための政策についての評価、考察を行った。

八尾町では、三者の考えが統一した方向に向かっておらず、協働という私の考えるまちづくりの理想の形はとられていなかったが、お互い「八尾を守ろう」という積極的な気持ちが前面に出ており、またその気持ちは積極的な活動への発想にも結びついていたように思う。それらのことを考えると、今後八尾のまちづくりにおいて一番重要だと考えられる、八尾を守る気持ちはすでに確立されているようだ。

しかし、この気持ちは行き過ぎると、お互いのまちづくりの考え方に行き違いをうみかねない。お互い行き違いのないようにコミュニケーションをしっかりとって欲しい。

本館 孝文 (M1)

今回のゼミ研修旅行で初めて八尾地区を訪れたので、旅行前には何のイメージも掴めないまま、おわら風の盆と古い街並みが有名ということぐらいしかわかりませんでした。実際行ってみると、やはり金沢市と同じ古い街並みがあり、特に石畳を活かした特殊な街並みや歴史的建造物により街の歴史を感じることができました。また、そばや焼きそば寿司な

どおいしい食事も堪能することができました。是非、活性化に活かして欲しいと思います。

私たちのグループでは八尾町の代表的な行事である風の盆を軸にどのようにまちづくりが行われているかということから、八尾総合行政センターの担当者の方、住民の側では八尾商工会の方と観光協会の方にインタビューを行いました。それぞれのインタビューではっきりしたことは、街を住みよくしたい、活性化させていきたい、そのためには市民と行政が力を合わせていかなければならないということを通認識として持っているということでした。八尾地区に限った事ではないのですが、違う立場で違う考え方を持つ方々が同じ方向に突き進むまちづくりというものは力強いと思います。

時間も限られていたので今回インタビューさせていただいた方は4名でしたが、もっと多くの人たちの意見を聞いてみたかったです。しかし、調査以外のときでも、住民の方々と接することができたのですが、とても暖かい人たちばかりで、気さくにお話することができました。また、自分たちの街に誇りを持っていることも感じ取ることができ、こういったものが八尾地区を支えているのではないかと思います。

最後に、お世話になりました総合行政センターの方々、商工会、観光協会、そして住民の方々に感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

竹迫 圭祐 (M1)

研修前からの八尾町に対する印象は「曳山祭」「おわら風の盆」の二つであり、研修にあってみて、実際のまちづくりはその二大イベントを中心に行われているのだという印象がさらに強まった。特に「風の盆」は八尾地区を訪れる観光客数全体に対しても大きな割合を占めており、そのことから生じる弊害や課題がそのまま八尾のまちづくりの課題になっているといっても過言ではないように感じた。

研修中にまちの人の話を伺う機会があったが、自分の住む家に大きなこだわりと自信を持っておられるようで、家の自慢話を楽しそうになされた。こうした自分の家に誇りを持つ気持ちが、自分の住む地域を愛することにつながっているのだと感じた。実際、立ち並ぶ家を見てみると、エアコンの室外機を格子で覆って景観に配慮している家など、こだわりを持つ家が多かった。自分の住む地域を愛する住民の方と、その活動を支援する行政による補助がうまくかみ合って、今の八尾の町並みがあるのだと感じた。

八尾総合行政センターの方と八尾商工会の方にお話を伺う機会があり、それぞれが目指すまちづくりには共通点が多いと感じた。共通認識の下でまちづくりを進めていけると、動きやすいと思う。市町村合併によって資金面では充実するようになったようであるが、市の職員の方は知識が十分ではないこともあり、昔から八尾に商工会側としては、以前よりも整理して説明しなければ伝わらないといったこともあるようだ。市町村合併後に新しくなった行政と商工会の関係ではあるが、連携等うまくいっているようなので今後の八尾の町に反映されるといいと思う。

たった二日間の研修旅行だったが、またゆっくり訪れたいくなるような魅力的な雰囲気

ある町だと感じた。

蓮實 祐樹 (B4)

今回の研修旅行では富山県八尾において、伝統的かつ文化的な町家の特徴的な外観形成や石畳の道路と、非常に修景に力を入れていることを感じました。特におわら風の盆と曳山祭りという二つの祭事に見事に適応した街並みというのは、素晴らしいと思いました。また、インタビュー調査におきましては、行政の方をはじめとし、観光会館（曳山展示館）や住民の方々にお話しを伺っていると、八尾に住む方々の景観や伝統行事に対する意識の高さといったものが伝わってきました。

行政の行っている八尾地区まち並み修景等補助事業についてですが、制度の期限制限を設けることで早期の効果発現を図る試みであり、現場では実際に建替えも行われており、予想される外観修景は八尾の風情・情緒をより伝えるものになるのではないかと思います。今後、住宅の修景はますます進むと考えられますが、集中的に修景を行っている地区以外での無電柱化や、道路脇を流れる用水路のデザイン的利用といった公共的な意義を持つ部分についての修景が望まれていくのではと思いました。

今回の研修で一番強く感じたことは、八尾は古くからの伝統と時代に即した変化の両方を大事にしているということです。元禄の頃から伝わる風の盆も各時代の変化とともに受け継がれていることや、八匠による新しい技術を利用した八尾型住宅の技術開発といった積極的な取り組みなどに見られます。商人文化で栄えた気質が今も残っているのではないのでしょうか。

最後に、自分にとって有意義な研修旅行であったことは言うまでもありません。

宮脇 達也 (B4)

今回の八尾町での研修旅行では、市の方々、また商工会の方々に話を聞くことが出来、とても有意義な二日間だったと思います。

まず市の方々の話では、風の盆を行うにおいてどのような問題があつて、その対策としてどのような取り組みをしているのかを聞くことが出来、自分が考えていたよりも大変な取り組みをしているということがよくわかりました。

特に風の盆を行っている地域のまわりに駐車場と博物館などの施設で三角形を作りそれにより観光地としてのよさを向上させようとしていることがいい知識になったと思います。

次に商工会ですが、いくまえに私が予想していたような取り組みとは違う取り組みを多く行っていることがわかりました。

商工会の女性の方々にグループを作り、八尾の観光についての知識を勉強して、八尾の商店街の商店で仕事に参加させ、そこに訪れる観光客の質問に答えられるようにしている取り組みはとてもいい取り組みだと思いました。

また行政と商工会のどちらにも共通していることは風の盆自体で観光客を増やそうとし

ていることはなくて、それ以外のときに通年でどうやって観光客を増やすのかという点で取り組みを行っているということでした。

またその取り組みで八尾の定住人口を増やすことも考えているということでした。

今回の研修旅行で得た知識をこれからの研究に役立てていければよいと思っています。



4. 「市町村合併と八尾のまちづくり」



Cグループ

博士前期2年 中野 達也

博士前期1年 串田 隆昭

田中 志野

学部4年 小林 直史

中山 祥子

竹内 俊雄

1. はじめに

i) 八尾町の概要

八尾町は町建てから約 350 年余の歴史ある町であり、かつては養蚕、和紙などの商いで栄え、「富山藩の御納戸」とも呼ばれていた。その中心市街地では「曳山」と 300 年の歴史を有する「越中おわら」の発祥の地で、歴史と文化の息づく町である。「おわら風の盆」期間中には、約 25 万人の観光客が訪れる一大行事となっている。また、坂の町としても有名な八尾には、井田川沿いに残る石垣や往時から伝わる謂われや名称がある坂や路地が多く残っている。さらに、2005 年 4 月 1 日に富山市・八尾町・婦中町・大沢野町・大山町・山田村・細入村は富山市となった。合併により、富山市は富山県の約 3 割の面積を占め、全国の県庁所在地の中で 2 番目に広い都市となった。また、合併後の富山市の人口は 421,249 人（2007 年 2 月 1 日現在）、旧八尾町は 21,810 人（2005 年 10 月 1 日現在）、人口・面積・財政規模も富山市となったことで大きく拡大し、これまでの八尾町単独行政よりも、より広域的なまちづくり活動が可能となった。

ii) 八尾地区のまちづくり

これまで八尾地区では、固有の町並みの再生に取り組むなど、歴史的・文化的遺産を活用し八尾らしい町並みの整備を行ってきた。また、八尾式住宅の再生に合わせ道路の石貼舗装・電柱類地中化・流雪溝のデザインなど景観の形成を行ってきた。

また、ソフト面でも「坂のまちアート」（平成 14 年度地域づくり総務大臣表彰受賞）などのアートイベントを開催し積極的にまちづくりに取り組んでいる。

八尾町では「おわら風の盆」や「曳山まつり」がよく知られているが、それらに安住することなく新しいイベントに取り組んでいる。「坂の町アート」では中心市街地全体をアート会場としたことで地域住民の一層のまちづくりへの意識が高められ、さらに、8 市町におけるリレー形式のアートイベントへと発展するなど活性化の効果が広域的広がりを見せている。

iii) 調査目的、方法

本調査では、市町村合併がまちづくりに与えた影響や合併後の旧市町村の連携によるまちづくりについて調査することで、まちづくりの問題点と今後の八尾町のまちづくりのあり方について検討することを目的とした。

そこで、本調査では八尾町のまちづくりの実態を行政、住民、観光客の 3 者の立場から把握する。

ヒアリング内容は市町村合併とまちづくりに関することで、行政の立場からは八尾町総合行政センター、住民の立場として八尾町商工会とその他地域住民からヒアリング調査を行い、さらに私たち自身が町を歩き感じたことも観光客の立場として考慮し、検討を行う。

2. 調査スケジュール

i) 9月11日(火): 1日目

旧町の町並みと井田川沿いの石垣を観察後、行政センターの方から合併後のまちづくりに関してヒアリングを行った。終了後、地域住民の方・商工会でヒアリング調査を行った。ヒアリング内容としては、「合併後変化したところはないか、合併に関する意識」などや行政センターで伺った「コミュニティバス・まちなめぐりバスの運営・利用のあり方」に関して中心に調査した。

ii) 9月12日(水): 2日目

前日に引き続き、八尾式住宅が多く再建された諏訪町通り(日本の道100選)や城ヶ山公園などの観察と商店街の方々へのヒアリング調査を行った。また、鏡町では元大工の方からおわらの歴史などについてヒアリングすることができた。

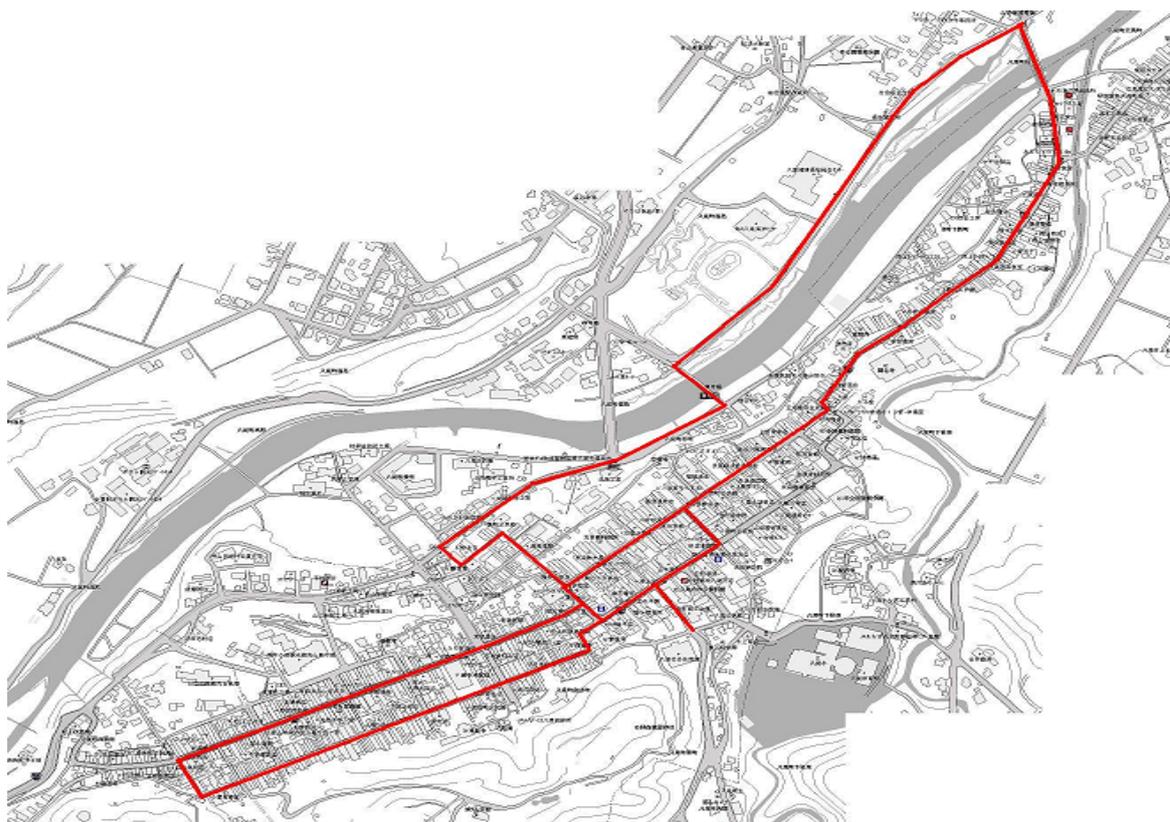


図 4-1 Cグループ調査ルート

3. 調査結果

i) ヒアリング調査結果（行政、住民、観光客）

市町村合併とまちづくりに関するヒアリング調査の結果を以下に記す。

◆行政（八尾町総合行政センター）

合併に関する行政側の意見では、合併をプラスに捉えたものが多かった。合併による最もメリットとしては「財政面で豊かになった」ことが挙げられた。

旧八尾町では町民ひとり当たりの財政負担が富山県でも比較的大きかったが、合併によりこれが解消された。財源の拡大により八尾式住宅への建替えに関して補助金が出すことができるようになり、導入された7月以降申請数が20件を超えるなどまちの景観作りにも大きな影響を与えている。また、行政人口の拡大によりまちづくりの視野が広がったことや、提案型観光などソフト面でも新しい動きが出来るようになったという意見が挙げられた。

一方、富山市となったため行政組織全体が大きくなり動きづらくなったことや、富山市における「観光地」としての位置づけにより、まちづくりの主体が住民から観光客へと移ってしまっているのではないかという合併によるデメリットも挙げられた。

◆住民（八尾町商工会、商店街・住民の方々）

また、コミュニティバス・まちめぐりバスの運行に関しては多くの意見が挙げられた。市町村合併前から運行していたコミュニティバスに関しては、高齢者や免許の持っていない住民の利用が見られるが、旧町の住民にとっては利用しにくいことや、おわらなどイベント時には通行制限のため利用できない



写真 4-1 ヒアリングの様子（行政センター）



写真 4-2 ヒアリングの様子（行政センター）



写真 4-3 ヒアリングの様子（住民）

ことが不便であるが、それらの面も上手く活かして有効に利用したいという意見がみられた。

一方、合併後に観光客向けに導入されたまちめぐりバスに関しては、定時運行・均一料金とコミュニティバスと比較して利用しやすくなっている。しかし、観光客向けのバスであるため石垣がみられる川沿いのルートであるため旧町の住民にとっては利用しにくいという面を持つことも分かった。



写真 4-4 まちめぐりバス



写真 4-5 井田川沿いの石垣(バス周遊ルート)

◆観光客（私たち）

今回の八尾町探索では、静かな町並みを探索することができた。坂と石垣の独自の景観や、旧町には伝統的な八尾の住宅や美術館などがあり、風の盆の期間以外でも落ち着いた観光地として散策できる。また、観光客向けに導入されたまちめぐりバスに関しては高山本線への接続や、石垣や主要観光地など八尾の見所を周遊するルートとなっているため非常に利用しやすい。

ii) ヒアリング調査結果（その他、市町村合併によるデメリット）

八尾総合行政センターや八尾町商工会、住民の方に対するヒアリング調査の結果、市町村合併後でも、概ね、住民主体のまちづくりが成功しているのではないかとことが言えると考えられます。しかし、市町村合併後のまちづくりに関する住民の意見の中には、市町村合併による影響は、必ずしも良い影響ばかりではないというものがありました。

◆富山市となったことで、行政に納めていた仕事が、富山市で以前から利用していた業者へと移ってしまい、合併前にあった仕事の受注が無くなってしまふことによって、影響が出た自営業の方がいるという意見がありました。

◆富山市に合併されたことでより良い公共サービスが期待できるけども、それらのサービスは富山市の中心部が優遇されて、八尾での対応は後回しにされてしまふのではないかと

いう不安があるという意見がありました。

◆広域的になったせいか行政の対処が遅くなったという意見がありました。

◆八尾町全体としては財政面で赤字だったので、富山市に含まれることで、それが改善されるのはいいことだと思うが、住民まで影響するかを考えると、あまり影響が無いと思うので、他のマイナス要素の方が多いのではないかという意見がありました。

これらの意見は、市町村合併後2年という短さからか、期待していた効果がまだ、住民が実感できるような目に見える形として現れていないことを示しているのではないかと思います。それよりも、まちづくりを行う行政が遠くに行ってしまったことの影響の方が早く出てしまい、今まで身近に感じていた行政と住民との間が、離れてしまったように感じ、マイナスのイメージが強くなってきているのではないかと思います。

また、まちづくりに関する意見以外では、市町村合併後に、おわらの時に設置されるようになった神社前の雨よけ用の舞台が、風情を壊しているのではないかという意見がありました。祭という地域に根ざした文化に対しての理解は、八尾町と富山市とで異なり、住民としては、合併前の従来どおりのほうが良いと感じているのではないかと思います。

iii) ヒアリング調査結果まとめ

今回、八尾町における合併前後の変化についてヒアリング調査を行った結果、行政・住民・観光客の3者から八尾のまちづくりに関して様々な意見を得ることが出来た。それぞれの立場により多少異なるものの、3者の意見を集約してみると、合併後のまちづくりで大きく変わった点は、八尾には「おわら」や「曳山」などの観光資源があったため、「富山市の観光」という面を担うことになり、まちづくりの主体がこれまでの住民から観光客へ移行した点である。

その一例として、外観修景補助やまちめぐりバスのなどとして挙げられており、観光客へ配慮したまちづくりが行われていることがわかった。

合併によるデメリットを尋ねたところ、合併後わずか2年のためあまり挙げられておらず、これらは時間の経過と共に出てくるものと考えられる。今回多くの意見が出されたまちめぐりバスとコミュニティバス、この2つのバスのあり方も今後のまちづくりの課題であると考えられる。

また、観光資源として注目されている「おわら風の盆」などの行事においても問題が浮上していることが分かった。過疎化・高齢化の影響による後継者不足である。これらの問題解決と若者への求心力向上も今後、八尾町が富山市の観光地としてありつづけるために必要である。

合併により、これまでの八尾町のまちづくりではできなかった豊かな財源による建替補助など重点的な整備に投資できるようになった反面、観光客重視のまちづくりに変化したこ

とで住民に対するサービスへの一層の配慮も必要となってくると考えられる。

vi) 他の工務店と八匠の関係

八尾町には、八匠に属していない地域の大工棟梁・工務店も数多くあるが、それらと八匠は建築組合の会合等で交流しており、一緒に補助事業の勉強会を行うなど、競合しながらも良好な関係が築かれていることが伺える。

vii) 今後の課題・問題点

最後に、今回のヒアリング調査で明らかとなった八尾の町並みの修景整備における課題をまとめる。

まず、八尾町は住宅の修景・建替えは、比較的順調に進んでいるといえるが、店舗・商店等の修景・建替えは、構造や外観等の問題から困難であるという問題がある。これらの建替えを促進するような法的拘束力のある条例等の制定、施行が望まれる。

次に、若い世代が建替えを行う際に、住宅メーカー等が参入してくることにより、八尾らしい町並みが壊されていく恐れが生じてきている問題がある。どのような建替えを行うかということはあくまで個人的な嗜好に一任されるため、若い世代の人に八尾らしい町並みの素晴らしさを伝えることが重要であると考えられるが、今までもそういった活動が行われてきたとの経緯からも、一筋縄ではいかない根の深い問題であると思われる。

4. 提案

全国でも有名な観光地である、八尾は1年を通した観光客の誘致を目指しており、そのためには観光客に対応した交通サービスの整備のようなハード面の整備と観光ボランティアのようなソフト面の対応が必要となっている。しかし、観光客へのサービスに重点を置きすぎることによる、住民生活の悪化は本末転倒であるため、現在の八尾の高齢化事情等を考慮したまちづくりが必要と考えました。

「住民と観光客によるまちづくり」

そこで、私達のグループでは「住民と観光客によるまちづくり」を考えました。この提案は、住民の立場、観光客の立場、双方を考慮することにより、観光地としての八尾、定住地としての八尾が両立できるようなまちづくりを目標としております。具体的な提案としては、

◇まちづくりにおける住民・観光客ともに参加できるイベント、祭りの積極的な導入によって、八尾に対する興味を深く持ち、観光客側からの意見を聞く

◇現在も進んでいる、町内の商業施設の従業員による観光ボランティアをさらに増やしていくことで、住民のまちづくり活動への意識向上と観光客との意見交換が活発に行うを考えました。

5. 感想

中野 達也 (M2)

今回、研究室活動の一環として「市町村合併と八尾のまちづくり」について様々な方々にご協力頂き大変勉強になりました。ご協力して頂いた方々に対して感謝の気持ちで一杯です。

今回の調査では、市町村合併による行政側、住民側、観光客側のまちづくりに関する意識の変化を中心に調査させて頂きました。これによって、市町村合併という大きな都市の転換を、非常に前向きに捉えまちづくり活動を行っていることが全体を通して感じました。また、「おわら風の盆」や「曳山まつり」といった昔ながらの祭りを活かすことだけを考えるのではなく、1年間通した観光客の来町を目指し、住民側が中心となった時代を捉えたイベント「坂のまちアート in やつお」のように先を見据えた新しい取り組みも活発で、非常に勉強になりました。

私の地元も平成の大合併によって市町村合併された市の一つです。総合行政センターの方におっしゃって頂いた「それぞれの地元にある伝統の祭りを大切にしてください」という言葉のように、今後自分の身近な活動に今以上に参加し、まちづくりについてより考えていきたいと思います。

串田 隆昭 (M1)

都市計画を専攻している身として、市町村合併に対する地域住民の意見を聞く機会を得ることができ、いい勉強になったと思います。八尾では、八尾型の住宅やおわら風の盆のイメージが大きく、それを中心にしたまちづくりを行うことも重要だと思いますが、今後、住民参加のまちづくりを有効に進めていくためには、市町村合併したことによる住民の戸惑いへの対応も必要だと思います。また、市町村合併により、以前より広範な地域を対象としたまちづくりが可能になる反面、昔からのつながりが強い、狭い地域に対してのまちづくりをどのように行っていくかが課題になっていくのではないかと思います。富山市の一部としてのまちづくりはもちろん、八尾の独自性を活かしたまちづくりが行われることで、八尾らしさを失わず、富山市としての八尾のまちづくりを行って行って欲しいと思いました。

田中 志野 (M1)

今回の研修旅行では現地実習によってインターネットや資料では分からなかったまちの様子を実際に知る良い機会でした。八尾といえば風の盆で有名なので、私も何年か前に訪れたことがありましたが、風の盆の幻想的な姿と風の盆後の静かな町の新たな姿を知ることができました。調査時間に町内を視察し八尾式の住宅は全て同じように見えてひとつひとつが個性のあるものだと分かりました。また、古い住宅と建替後の住宅が上手く溶け合

い現在の街並みが形成されたことを実感しました。八尾町周辺では大きな敷地を確保できず近くに大型店が出店できないため、商店街では昔ながらの商店が残っており、旧町では現在でも日常生活品は近所で賄うという昔ながらの生活が残っていることを知りました。調査を通して、現在のところ八尾町は合併によって多くのメリットを得たことが分かりました。

ヒアリング調査時に町民の方にお話を伺うときも、皆さん気さくに色々教えて頂いたことが印象に残っています。「坂の町・八尾」の由縁である坂や石垣の様子、それを活かしたまちづくりなど実際に八尾の町を歩いてみないと分からないことも多くあり貴重な経験となりました。

小林 直史 (B4)

八尾へは今回初めて行きました。風の盆については以前から多少は知っていましたが、詳しいことは何も知りませんでした。歴史的な町並みは歩いていると風情を感じました。時に三味線の音が家の中から聞こえてきたりもしました。住民の方々も大変優しく、町を歩いていた時に声をかけてくださり、昔の町並みについてや風の盆の成り立ち、歴史について詳しく教えていただきました。このように、多くの人たちにより作られ、多くの人たちに愛されている祭りがある八尾が大変うらやましく、素敵なことだと感じました。

ヒアリング調査時に住民の方々に合併についての意見をお聞きしたところ、みなさんが快く答えてくださいました。自営業を営んでいる方のお話では、注文が減ったなどのマイナス意見や、防災の管理が徹底したなどのプラス評価の意見がありました。また、障害者のお子様がいる住民の方のお話では、保護が手厚くなったことを喜んでいました。私の地元も最近合併されましたが、合併後に住んでいなかったもので、住所が変わったことぐらいしか変化はないと思っていました。しかし、実際に住んでみたらきっと気がつく点が多少はあると思います。

伝統を継承し町並みを残していくことは大変だと思いますが、住民の皆さんで協力して後世に伝えていって欲しいと思います。今回、合併やまちづくりについて大勢の方の意見を聞くことができ、実際にその地へ訪れることができたのでよりいっそう勉強になりました。

竹内 俊雄 (B4)

今回初めて八尾を訪れたが、街路や街灯、古い町家など情緒ある街並景観が残っており、景観も含めた街全体の振る舞いや行いにとても魅了された。何百年も前からそこに存在する商屋が建ち並び、一つの街路を形成し、そこに住む住民らが一体となって自分たちのまちづくりに携わっている感じが見てとれた。

多くの住民の方に話を聞くことが出来たが、それぞれの方がまちづくりに対する関心や意見を持っており、近年、街づくりに関する住民らの興味・関心は高まっていると言われていたが、まだまだ八尾地区のような多くの住民がまちづくりに大きな関心を持つ都市は少

ないと言える。そんな中で八尾の住民らのまちづくりへの参加意識は理想的だと感じた。

八尾のまちづくりと密接な関係である風の盆について、踊り子の技術や伝統などいろいろお話を聞くことができたが、祭り開催時の運営や交通規制等の改善点を見直すことが更なる八尾の活性化につながると感じた。

個人的に石垣の景色はとても印象的だった。風の盆開催時期ではなかったため見る事が出来なかったが開催時に行われる石垣のライトアップは是非一度見に来たいと思う。

中山 祥子 (B4)

実際に八尾に行って見る事で、資料からは分からないことを多く知ることが出来ました。

町民にヒアリング調査を行ったとき、「富山市と合併しなければ、八尾は一人当たりの借金が富山県内で一番高かった」とおっしゃっており、自分の地区のことを町民一人一人がよく知っており理解しているという印象を受けました。住民の八尾に対する気持ちを知ると同時に、だからこそ八尾の祭りなどが盛り上がるということを知りました。

風の盆の観光客の実態には驚かされるものがありました。私も楽器を演奏する身なので、三味線や笛が演奏しているときに観光客によって壊されるというのは信じ難く、とても悲しくなりました。楽器は自分にとっての宝物ですし、それによって自分を表現出来るようなものなので、壊されてしまった人々のことを考えると辛かったです。観光客対策としていろいろ提案されているのに、自分が見たいだけ、自分ひとりくらいなら大丈夫という考えが蔓延しているように感じました。

これからも、観光客対応もさることながら、風の盆おどりという伝わってきている大切なお祭りを守っていて欲しいと思いました。

あ と が き

古代より栄えてきた八尾の町は、町の中心部では、昔ながらの伝統的な居住環境を保存し、地元住民みずからが伝統的な踊りを守り、全国においても有名な観光地になっている。町役場の関係者も「おわら風の盆」の一部ではないかというような印象が強かった。富山市に合併されても、「おわら風の盆」の町という存在感が薄れることが決してないと感じた。

「おわら風の盆」は、町にとっては「命」である。昔からの都市形態を維持してきた八尾町の中心地は、伝統的な生活スタイルが保存され、古くから形成されてきた町の土木的財産も大切に使い続けている。また、経済発展のためにも、無理やりに町の伝統を変えることがなく、町の都市計画関係者はまちづくりには「風の盆」を如何に生かせるかに対して、一生懸命にがんばっていると、私は非常に感心した。

八尾町では、「風の盆」を中心とする歴史町並みを活かす計画が動き始めている。伝統的な生活の面影が残っている諏訪町、あちこちに見られる街灯や石垣、昔の生活感が強く反映されている町並みなど、これらもすべて修景等補助事業の成果と思われる。

八尾の住民は、非常に親切で、建物の建て方、町の祭りの歴史など様々なことを語っていただける。そのお陰で、今回の研究室の研修は、こころが暖かく、また都市形態や町並み景観等についての理解を深めることができた。

沈 振江（准教授）

2 日間の短い滞在でしたが、風の盆を担ってきた町衆の自主・自立の精神に深い感銘を受けた八尾訪問となりました。風の盆がまちづくりの担い手を育み、まちの空間に意味を与え、人びとの生きがいとなっていることを感じることができました。サステイナブルな地域づくりのあり方について多くを学ばせていただいたと思います。新・富山市の中で、八尾がこれまで以上にきらりと輝くまちになっていくことを、楽しみにしています。

学生たちは、まちを歩き、八尾の方々にお話を伺う中で、多くの刺激を受けたようです。彼らがそこで得たものは、この報告書ではまだ十分に表現できていないかもしれませんが、今後の彼らのキャリアの中で必ず役立ててくれるものと信じています。八尾総合行政センターの皆様、住民の皆様に、この場をお借りして、あらためて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

小林 史彦（講師）